

# 『遐邇貫珍』に関する一考察：日本関係記事をめぐって

A Research on *Chinese Serial*: Focusing on Japan-related Articles and News

方 亮  
FANG Liang

**要旨** 『遐邇貫珍』は 1853 年から 1856 年にかけて香港で刊行された最初の中国語定期刊行物であった。イギリス宣教師が編集者を務め、主に西洋政治、歴史、地理、科学、宗教などの知識を紹介する一方、「近日雑報」欄にて中国または欧米のニュースも報道していた。その中には、ペリー艦隊の日本来航をめぐる日本関連記事が少なくない。また、ペリー来航に協力した中国人学者羅森が書いた日本見聞録「日本日記」も『遐邇貫珍』に掲載され、よく知られている。本稿はそれらの日本関係記事について、英字新聞の関係記事との比較を通して、ペリー来航に対する『遐邇貫珍』の関心を考察する。また、「日本日記」の執筆姿勢と『遐邇貫珍』の編集方針との異同について検討する。

## はじめに

『遐邇貫珍 (*Chinese Serial*)』は 1853 年 8 月から 1856 年 5 月まで発行された香港最初の中国語定期刊行物である。中国及び西洋のニュースの外に宗教、科学の知識及び広告も掲載され、月に一回の刊行であった。『遐邇貫珍』は以前から研究の対象として取り上げられ、日本や中国の研究者による研究成果が、すでにいくつか存在している。例えば、石田八洲雄は「『遐邇貫珍』に現れたミルトンの詩（盲目の詩）に就て」の中で『遐邇貫珍』に掲載されたイギリス盲目詩人ジョン・ミルトンの詩を考察した。また、増田渉は『西学東漸と中国事情』の中で『遐邇貫珍』が幕末の日本に関心を持っていたとすでに指摘している。そして、卓南生は『中国近代報業発展史 1815-1874』において『遐邇貫珍』の成立や内容について紹介している<sup>1</sup>。さらに、戈公振『中國報学史』、李谷城『香港中文報業発展史』、李家園『香港報業雑談』、陳鳴『香港報業史稿』など中国側の研究は、『遐邇貫珍』を香港最初の中国語定期刊行物として位置付けている。中でも『遐邇貫珍』に研究対象を絞った最も総合的な研究成果としては関西大学東西学術研究所が出版した『遐邇貫珍の研究』が挙げられる。その中で、松浦章はペリー艦隊の動向、太平天国、上海小刀會など、『遐邇貫珍』に載せられた近代東アジア世界に関する記事をまとめた。また、内田慶市は『遐邇貫珍』に掲載されているイソップ物語の中国語訳について考察した。そして、沈国威は詳しく『遐邇貫珍』の所蔵状況や記事内容などを解題で明らかにした他、索引を付し、さらに、またロンドン大学アジア・アフリカ研究所図書館に所蔵されている『遐邇貫珍』の影印本文を資料として掲載した。

『遐邇貫珍』が発行された 1853 年から 1856 年にかけて、香港を所有したばかりのイギリスは中国の内乱の対応に追われる一方、ヨーロッパにおいてはクリミア戦争の戦禍に巻

1) 原文「『遐邇貫珍』(1853～56)―香港最初の華字月刊紙についての考察」は立教大学『応用社会学研究 (19)』(1974 年)に掲載されている。

き込まれていた。そのような時代背景の中で発行されていた『遐邇貫珍』は、当時イギリス植民政府が内外の危機的状況をどのように見ていたのかを考察することに有用な資料と思われる。その同時、アメリカはペリー艦隊の派遣によって日本への進出への足掛かりをつかんだ。ペリー来航をめぐる日本関係の記事が『遐邇貫珍』には多く見られる。特にペリー艦隊に協力した中国文人羅森が書いた日本見聞「日本日記」は、幕末中国人の日本観に関する研究においてしばしば取り上げられてきた。例えば、王晓秋は、「近代中日文化交流の先駆者羅森」と「幕末の日米条約交渉に立ち会った中国人羅森—150年前の東アジア史における利他行為の一例として」において、羅森及び「日本日記」に注目し、その史料的価値を高く評価した。また、陶徳民は「日米和親条約交渉における中国語の役割—羅森『日本日記』等に関する再考」の中で羅森の事例を通して、日米交渉の中で中国語の果たした役割を探究した。しかし、それらの研究は「日本日記」の内容に注目した一方で、掲載誌である『遐邇貫珍』との関連性を閑却させたように見える。

本稿は、それらの先行研究を踏まえて、『遐邇貫珍の研究』に掲載される『遐邇貫珍』の影印本文を参照して、日本に関する記事を再確認した上で、同時期香港の主流であった英字新聞にあるペリー来航関係報道記事を抽出して比較したい。それを通して、ペリー来航に対する関心や態度、また関係ニュースの編集方針において、中国語刊行物の『遐邇貫珍』は英語刊行物とどのように異なるのかを考察していきたい。そして、紀行文としての「日本日記」と、『遐邇貫珍』に掲載される類似内容の記事との比較を通して、「日本日記」の執筆姿勢と『遐邇貫珍』の編集方針との異同についても検討を試みる。

## 1 『遐邇貫珍』について：香港最初の中国語定期刊行物

卓南生の研究によれば、アヘン戦争以降、新教布教根拠地が広東やマカオから次第に香港に移転され、香港における伝道協会の伝道団 (Mission) が成立した3年後の1853年に南京条約後における最初の華字定期刊行物——『遐邇貫珍』が誕生した<sup>2</sup>。こうした事情も含め、『遐邇貫珍の研究』の中では、『遐邇貫珍』の歴史や内容が比較的詳細にまとめられている。『遐邇貫珍』の英語名は *Chinese Serial* で、モリソン教育会<sup>3</sup>の援助を受け、宣教師メドハースト (麥都思)、ヒリアル (奚禮爾)、レグ (理雅各) が編集に携わり、英華書院 (当時英華学堂) で印刷されており、1856年5月に廃刊となるまで続いた<sup>4</sup>。月に3000部、計32冊<sup>5</sup>が刊行された『遐邇貫珍』は、香港のほかにも広州、廈門、寧波、福州、上海、そして内陸でも購読が可能であった<sup>6</sup>。そして、最終号の「遐邇貫珍告止序」にある「総督巡撫及び文武大臣から一般庶民まで『遐邇貫珍』を読むのを楽しまないことはな

2) 卓南生「『遐邇貫珍』(1853～56) —香港最初の華字月刊紙についての考察」応用社会学研究 (19)、1974年、146頁。

3) 「馬禮遜 (モリソン) 教育協会はロバート・モリソン宣教師が病死した翌年 (1834) に成立されたものである。その由来は彼を追慕する有志たちの間から、期せずして彼の徳をたたえ、残された事業の完成と、中国のキリスト教化のため、あらゆる困難をも顧みなかった遺志を継承するための記念事業を行うことへの呼びかけから始まったものである。」上掲、147頁。

4) 『遐邇貫珍の研究』松浦章・内田慶市・沈国威編著 (関西大学東西学術研究所研究叢刊24) 関西大学出版部、2004年、92頁。

5) 「毎月1号で計34号の計算になるが、そのうちに1854年3月、4月号と1856年4、5月号が合併号であったので、実際に刊行されたのは32冊であった。」同上。

6) 上掲、94頁。

い<sup>7)</sup>』という呼びかけに示されている読者層について、『遐邇貫珍の研究』は少々誇張的な表現ではあるが、広く読まれたことは間違いないであろうと述べている<sup>8)</sup>。前述のように、『遐邇貫珍』の編集長はイギリス人宣教師であったため、中国語による刊行物の発刊には中国人スタッフの協力が不可欠であったと思われるが、その中で、最も重要な人物であったのは黄亞勝（黄勝）及び王韜である。彼らは後に華人が主導して出版した中国語新聞紙『循環日報』にも深く関わっていた。

先に述べたように、『遐邇貫珍』の内容は多方面に及んだが、最初に取り上げた事象は、西洋の地理であった。例えば、1853年9月の第2号では、天体としての地球の様子を紹介する「地形論」また西洋までの路線を書く「西程述概」が掲載されている。続いて、西洋の政治制度の紹介がなされた。例えば、1853年10月の第3号ではイギリスの政治制度、また1854年1月の第2号では花旗國（アメリカ合衆国）の政治制度が掲載されている。そして、1853年10月の第3号にある「慧星論」や1854年11月の第11号にある「生物総論」のように物理、化学、生物などの科学知識も載せられた。最も紙幅を占めているのはほぼ毎号に掲載された、豊富な東アジアに関する消息を含んだ世界各地のニュースを伝える「近日雑報」である。

『遐邇貫珍』研究上の問題点として、卓南生は『遐邇貫珍』を香港最初の華字新聞紙であると述べているのに対して、『遐邇貫珍の研究』は『遐邇貫珍』を中国本土で閲覧できる最初の中国語雑誌と位置付けているように、『遐邇貫珍』が新聞であるのか、雑誌であるのかが不分明であることがあげられる。まずこの点から検討してみよう。中国新聞史研究の基礎を定めたと言われる戈公振は「我が国で報と言われるものは、すなわち日本の新聞、イギリスの Newspaper、ドイツの Zeitung・Nachricht・Bericht、フランスの Journal・Nouvelle・Courier・Mesager、イタリアの Jironale、ロシアの Газета である。その他、それを表現する名詞は多くあるが、ここでは例を挙げない。ただ、報という名称は簡単で意味が広くて習慣として使われることも長かった。故に本書でいわゆる報は、すでに雑誌やその他の定期刊行物を含むものである<sup>9)</sup>」と述べている。そして、「我が国の現代新聞紙は、外国人の手で生まれ、最初は月刊、次いで週刊、そして日刊となった……我が国最初の新聞紙は、ムラカで誕生した『察世俗毎月統記傳』（*Chinese Monthly Magazine*）である<sup>10)</sup>」と補足する。つまり、「報」とは、新聞・雑誌または月刊・週刊・日刊など全ての定期刊行物であると戈公振は解説している。したがって、卓南生は戈氏の説に傾いていると推測される。戈公振の説と異なり、『遐邇貫珍の研究』は月刊の発行周期や製本形式の特徴によって、また、上海最初の月刊『六合叢談』を創刊した中国学者・宣教師ワリーの話「*Chinese Serial. This is a monthly magazine*<sup>11)</sup>」を通して『遐邇貫珍』を雑誌と認定している。一方、李

7) 「上至督撫、以及文武員弁、下遞工商士庶、靡不樂于披覽。」上掲、407（312）頁。

8) 上掲、94頁。

9) 「我国之所謂報、即日本之新聞、英國之 Newspaper、德國之 Zeitung、Nachricht、Bericht、法國之 Journal、Nouvelle、Courier、Mesager、義國之 Jironale、俄國之 Газета。此外、尚有形容詞的名稱很多、不備舉。惟報字稱謂簡而含義廣、且習用已久、故本書之所謂報、嘗包括雜誌及其他定期刊物而言。」戈公振『中國報學史』三聯書店、1955年、1頁。

10) 「我國現代報紙之產生、均出自外人之手、最初為月刊、週刊次之、日刊又次之……若在我國尋求所謂現代的報紙、則以馬六甲所出『察世俗毎月統記傳』（原名 *Chinese Monthly Magazine*）為最早。」上掲、64頁。

11) 『遐邇貫珍の研究』松浦章・内田慶市・沈国威編著（関西大學東西學術研究所研究叢刊 24）関西大学出版部、2004年、91頁。

谷城は「新聞、雑誌、逐次刊行物の争議に拘らず報刊でそれらを総称し、報刊を営む業界を報業といい<sup>12)</sup>、『遐邇貫珍』が香港最初の中国語月刊であると紹介しているが、新聞か雑誌かの区分は曖昧にしている。そのほかの研究も、李谷城と同じく、『遐邇貫珍』を香港最初の中国語定期刊行物と定義し、新聞・雑誌の区分についての断定を避けようとする論説が多い。

振り返って、『遐邇貫珍』創刊の目的を見てみよう。創刊号の序言に

中国では上諭、奏摺を抄して掲載して、朝廷動向の大略を得るが、その他、日報の類はなかった。しかし、西洋の国々では、そのようなものは多く見える。安いため、清貧の者であっても購読できる。中には様々な消息、船便の情報、要人の往来、そして著作文章が掲載されている。大切なことに関しては、書信を通してすぐ四方に知られることになる。このように、一人二人しか知らなかったことに、後にみなが目向けることになる。もし中国もそのようになれば、楽しいことではないだろうか<sup>13)</sup>。

と述べられている。つまり、創刊者は西洋の「日報」のような刊行物をつくるために、『遐邇貫珍』を創立したわけである。ただ、実際には日報ではなく月刊であった。前述のような『遐邇貫珍』の内容から見れば、『遐邇貫珍』は、西洋の歴史、地理及び政治を紹介する一方、特に後期に至って主に「近日雑報」を中心として、時事問題やニュースを伝えていた。加えて、後に広告や船便情報も載せられたことを考慮すれば、総じて雑誌より新聞の適時性を求めていたと考えられる。一方、発行周期や製本形式によって、当時の英文新聞や後に出版された中国語新聞と大きく異なるのは自明であろう。したがって、『遐邇貫珍』を新聞と雑誌の特徴を兼備する香港最初の中国語月刊と評価するのは当を得たものであったように思われる。同時に、『遐邇貫珍』は香港中国語新聞史あるいは報業史の発端であると言っても過言ではないであろう。

## 2 「近日雑報」に見るペリー来航：英字新聞記事との比較

『遐邇貫珍』創刊号の「西興括論」には「中国は各地で禍乱が頻発し、盗賊が大勢に現れ、匪賊が機に乗じて横行する時期に当たっていたのである<sup>14)</sup>」と当時の中国の情勢を報じている。ここで言う「禍乱・盗寇・土匪」は太平天国、海賊海盜、そして三合會、小刀會及び天地會のような秘密結社を指していると思われるが、それらに対して、『遐邇貫珍』は深い関心を持っていたようである。W.G. Beasley が *Great Britain and the opening of Japan, 1834-1858* で

(1834年から1858年に) イギリスの対日政策は中国政策と密接に関連していた。中

12) 李谷城『香港中文報業發展史』上海古籍出版社、2005年、9頁。

13) 「中國除邸抄載上諭奏摺、僅得朝廷舉動大畧外、無日報之類。惟泰西各國、如此帙者、恆為豐見。且價亦甚廉、雖寒素之家、亦可購閱。其內備載各種信息、商船之出入、要人之往來、並各項著作篇章、設如此方。遇有要務所關、或寄信始現、頃刻而四方皆悉其詳。前此一二人所僅知者、今乃為眾人所屬目焉。中國苟能同此、豈不愉快。」『遐邇貫珍』影印本文1853年第1号(No.1)、『遐邇貫珍の研究』松浦章・内田慶市・沈国威編著(関西大学東西學術研究所研究叢刊24) 関西大学出版部、2004年、714(5)頁。

14) 「中國正直四方禍亂頻興、盜寇蜂起、土匪乘機横行。」上掲、712(7)頁。

国は常に両国の中でより重要であると認識されていた一方、中国での利益を維持または拡大するために、イギリスは中国における艦隊に対する完全な注意を必要としていたため、全権大使が日本交渉をサポートするために適切な力を集めようとすることは妨げられていた<sup>15)</sup>。

と述べるように、中国事情はイギリスの対日政策に深く影響を与えた。あるいは、主に当時中国内情に妨げられたため、日本進出においてイギリス側はアメリカより出遅れたと言ってもよいだろう。

一方、ペリー来航は幕末の日本に深い影響を与えた。松浦章は「このペリー艦隊の東アジア来航時期は、『遐邇貫珍』が刊行される1853年8月の直前であり、その意味でペリー艦隊の記録は『遐邇貫珍』と同時代の史料と言える<sup>16)</sup>」と述べている。そのため、『遐邇貫珍』に掲載される日本関連の記事の中で、ペリー艦隊の動向に関するニュースが最も多かった。松浦章は『遐邇貫珍』のニュース欄としての「近日雑報」からそれらの記事を『遐邇貫珍の研究』に詳しくまとめている。しかし、ペリー来航の時に、香港で刊行されていた中国語新聞は「近日雑報」のみであったため、『遐邇貫珍』の報道の着眼点や関心点の独自性を確認するためには、同時期に刊行されていた英文新聞も参照する必要がある。松浦章著『『遐邇貫珍』に見るペリー日本来航：羅森『日本日記』前史』の中で1850年代香港三大英文新聞の一つ「ザ・チャイナ・メール (*The China Mail*)」に掲載されたペリー来航に関する記事が転載されているが<sup>17)</sup>、そのほか、まだ言及されていない記事もある。ここでは、先行研究を踏まえて、同じく香港新聞としての *The China Mail* に掲載されたそれらの記事を抽出して、日本報道において、それらの英文新聞記事と異なる「近日雑報」の内容や編集方針を見出してみたい。

## 2.1 ペリー艦隊に対する注目

第1号と第2号の「近日雑報」には、

1853年8月1日第1号 (No.1)

五月中旬、アメリカ兵船と火船数隻は、アメリカのサンフランシスコから中国に行く火船を補給するために日本を中継地と石炭の貯蔵地とし、また開港と通商を求めするために上海から日本へ渡航した<sup>18)</sup>。

1853年9月1日第2号 (No.2)

15) It was, however, closely related to British policy in China. China was always recognised as being the more important of the two countries, and it was usually the protection or extension of British interests there, requiring the full attention of the China squadron, that prevented the plenipotentiary from assembling a suitable force to support his Japan negotiations. W.G. Beasley, *Great Britain and the opening of Japan, 1834-1858*, Japan Library, 1995, p201.

16) 松浦章『『遐邇貫珍』の描く近代東アジア世界』『遐邇貫珍の研究』(関西大学東西学術研究所研究叢刊24)、関西大学出版部、2004年、29頁。

17) 1853年4月2日付けの「ザ・ノースチャイナ・ヘラルド (*The North-China Herald*・上海)」及び1853年8月11日付けの「ザ・チャイナ・メール (*The China Mail*・香港)」に掲載されたペリーの来日に関する記事の翻訳が転載されている。松浦章『海外情報からみる東アジア：唐船風説書の世界』清文堂、2009年、364～368頁。

18) 「五月中旬、有花旗國師船火船數隻、由上海赴日本國、欲圖通商、並求該國王准其設立貯煤之所、以作中站、俾金山暨亞墨利加、與中國往來火船、從此接濟。」『遐邇貫珍の研究』松浦章・内田慶市・沈国威編著(関西大学東西学術研究所研究叢刊24) 関西大学出版部、2004年、709(10)頁。

前号にアメリカ兵船日本へ渡航したことが報道された。その使者は海軍提督ペリーであった。今月三日そのアメリカ船二隻は香港に戻った。前月三日（筆者注：嘉永六年・咸丰三年六月三日）に日本江戸海面に着いたと船員から聞いた。九日にペリー提督は、国主に派遣された日本大臣に国書を渡して来春に返事を受け取りに再来すると協約した。期限を緩めたため、ペリー側が余裕を持っていると見えた。また、日本側とうまく相談し、贈り物を交換したペリー艦隊は強圧の様子がなかった。そして、ペリー艦隊は十二日南に向かって帰りに出帆した<sup>19</sup>。

とあり、ペリー艦隊が日本を太平洋航路の中継地と石炭の貯蔵地とし、また開港と通商を求めるために日本へ渡航したことが報道された。ほぼ同時に、1853年8月11日付の *The China Mail* 紙は、ペリー艦隊は琉球を経由し、浦賀に到着したことをより詳細に報じている。

蒸気フリゲート艦サスケハナ号、ミシシッピ号およびスクープ型軍艦プリマス号、サラトガ号からなる艦隊は7月2日、琉球諸島的那覇を出港した。8日午前、江戸湾南端近くの伊豆岬に達し、湾を真っすぐ入って午後浦賀沖に投錨した……翌朝、浦賀奉行で三番目の高官である栄左衛門が訪れ、日本訪問の目的を確かめたあと、江戸にお伺いを立てる間の余裕が欲しいと言った……12日、火曜日に江戸から返事が届いた。皇帝は最高位の役人を任命し、合衆国大統領からの国書を受け取りに浦賀へ遣わす……14日の朝、サスケハナ号とミシシッピ号は久里浜沖に、舷側砲を岸に向けて停泊した……提督は、日本政府に熟考の時間を与えるため、3、4日後に帰路に着き、数か月後に返事をもらいに再来すると告げた……艦隊は17日に江戸湾から出航し、21号、22号の両日に激しい大風に遭い、7月25日に琉球に到着、そして8月7日夕方、艦隊中の2隻蒸気フリゲート艦が香港に帰ってきた<sup>20</sup>。

つまり、ペリー提督は江戸に大統領の国書を届け、贈答品の交換を行った上で、開港通商を提案し、来年、返信を受け取りに再訪することを約束したという最初の日米交渉が報じられた。「近日雑報」に記録される「禮物酬酢往還」の場面について、*The China Mail* は「艦隊出発の前日、奉行は多くの贈物をサスケハナ艦上に持参した。漆器やその他の日

19) 「前號曾敘花旗國師船前赴日本國公幹、充公使者、係其水師提督柏利、茲於本月初三日、自該處回港、率駕回火輪船師船二隻。聞其上月初三日、抵日本之耶陀海面。於初九日、與該國主專派之王大臣會晤、遂將原携國書交付、訂於來春復往接取復言、故寬其期、以見從容、無逼迫之意、兩家賓主欵洽、均有禮物酬酢往還、即於十二日揚帆南旋。」上掲、700 (19) 頁。

20) The squadron consisting of the steam-frigates *Susquehanna* and *Mississippi*, and the sloops-of-war *Plymouth* and *Saratoga*, sailed from the harbour of Napakiang, in Loochoo, on the 2d of July. On the morning of the 8th they made Cape Idzu, near the southern entrance of the Bay of Yedo, and, sailing directly up the Bay, anchored in the afternoon off the town of Uruga...The next morning, Yezaimon, the Governor of Uruga, and a nobleman of the third rank, came off, and after ascertaining the object of the visit, asked for time to dispatch an express to Yedo, in order to communicate the information, and obtain instructions how to act...on Tuesday, the 12th, an answer arrived from Yedo, stating that the Emperor had appointed an officer of the highest rank to proceed to Uruga, and receive the letter of the President of the United States...On the morning of 14th, the *Susquehanna* and *Mississippi* took up a position off the town, and lay with their broadsides to the shore...The squadron sailed from the Bay of Yedo on the 17th, and after encountering a severe gale during the 21st and 22d, arrived at Loochoo on the 25th July, and the two steam frigates returned to Hong Kong on the evening of the 7th August. 横浜開港資料館複製版 *The China Mail* (1853.8.11・NO.443) Vol.9, p130. 訳文『外国新聞に見る日本』(第1巻1852-1873本編)、国際ニュース事典出版委員会、39～40頁より転載。

本製品で、これに対し適当なお返しの商品が用意された……彼はのちに、鶏をたくさん船に持ってきた。それに対して箱いっぱいのアメリカ庭園植物の種をもらったのである<sup>21)</sup>とその模様を伝えている。

後に、1854年2月、ペリー艦隊は琉球を経由して再び浦賀を訪れた。「近日雑報」に

1854年2月1日第2号 (No.7)

この前日本へ渡航したアメリカ兵船は、前月香港に停泊した際に演劇を行ったことが数回あった。イギリス船員及び香港住民はすべて鑑賞を許されていた。両国の人々は極めて和やかであり、それは両国が志を向き合い、発展繁栄のために貿易を広げようとしていたためである。アメリカ兵船三隻と常用船二隻は、今月十四日に日本へ返事を受け取りに出帆する。出帆の際、イギリス兵船は火砲を打ち、アメリカ船を見送った<sup>22)</sup>……

1854年4月1日第3・4号 (No.8)

近日、日本へ渡航したアメリカ船は香港に戻ってきた。特派大使（ペリー提督）は日本側の執政官と貿易通商について協議した。また、二月二十五日に二つの港を開放する和親条約を締結した<sup>23)</sup>。

1854年5月1日第5号 (No.10)

三月五日、日本から香港へ戻ってきたアメリカ兵船がある<sup>24)</sup>……

とあって、アメリカは日本と通商・開港に関する最初の条約が締結できたことが報じられている。そして、二度目の日本交渉は「今回アメリカは日本と和親を進め、販売・運送・貿易及び開港について条約を定めた。アメリカ船が日本国内に市価で石炭を購入し補給することも可能となった<sup>25)</sup>」と報じられたように、アメリカ側にとって成果があった事を1854年5月1日第5号 (No.10) の「近日雑報」は、米紙のニュースから転載している。一方、*The China Mail* 紙には「日本はまもなく全世界に貿易が開放されることになる<sup>26)</sup>」と報じられているが、日米条約の内容についてまでは言及されていない。*The China Mail* 紙と異なり、「近日雑報」は日米和親条約の内容を全て報道している。

1854年10月1日第10号 (No.15)

……花旗與日本所立和約、共十二款、茲縷述其大意如左。

21) The day before the departure of the squadron, the Governor went on board the *Susquehanna*, taking with him a number of presents, consisting of articles of lacquered-ware and other Japanese manufactures...He afterward brought off a quantity of poultry for the vessel, and received in return a large box of choice American garden seeds. 同上。

22) 「日前揚帆赴日本國之花旗師船、其上月駐泊本港時、數次置演戲劇。凡英師船、及居港者、皆得往縱觀看。兩國人皆極諧睦、蓋因志趣同向、均欲有以推廣貿易共臻平康景象者也。其火輪師船三、常行船二、於本月十四日啓程前詣日本索取回書。開行時、英師船亦聲炮相送……」松浦章・内田慶市・沈国威編著『遐邇貫珍の研究』（関西大學東西學術研究所研究叢刊24）関西大学出版部、2004年、662（57）頁。

23) 「近日花旗國前赴日本之使舟業已旋港、據云使臣與日本執政大吏妥議貿易事務、於彼境開立二處埠頭、二月二十五日訂立和約章程妥竣矣。」上掲、652（67）頁。

24) 「三月初五日、花旗國有火輪船師船一號、由日本回抵香港……」上掲、648（71）頁。

25) 「花旗國此行、已立成效、和好遂定、允為立約、販運交易、開設埠頭。火輪船需用煤炭、亦允其境內照時價採買」同上。

26) We have very important intelligence from Japan, to the effect that the country will shortly be opened to the commerce of all the world. 横浜開港資料館複製版 *The China Mail*(1854.3.2・NO.472) Vol.10, p34.

- 一曰、花旗人與日本人、不論何人、及會晤何地、必須禮貌周旋、相親相敬。
- 二曰、日本給箱館下田二港、為花旗船訂泊之所、凡木料、水、糧、煤炭、一切要需之物、任其採買。
- 三曰、凡花旗船在日本海濱、倘遭風濤觸礁損壞之患、日本人務須協力相救、至被拯之水手人等、并破船所有貨物、須于箱館下田二港交付其本國之人。若日本人在花旗遇有破船之患、花旗人相助亦如之。至於救護所支工費、則兩免賠還。
- 四曰、花旗破船之人、及各商人、在彼國地方遊玩、不得約束、然亦必遵所宜之律。
- 五曰、花旗破船之人、及各商人、在箱館下田二港、妥居妥處、限于日本七里之內、任其遨遊、無得禁阻。日本里數約四倍中華、所云七里、即中華之二十八里有奇。
- 六曰、凡各商貿易、或有相議事宜、必須矢公矢慎、以免嚷鬧滋事。
- 七月、各商貿易、花旗人或以金銀交換、或以貨易貨、若有貨物、花旗人不願售者、亦必在任其復載出港。
- 八曰、木料、水、糧、煤炭、及各需用之物、必須向日本所該管轄之官領取、不得別向他人。
- 九曰、將來日本倘與別國建立和約、凡俾別國人以利益之事、或更有逾於今日所立之約者、花旗人必得同與其利、無有異詞。
- 十曰、若花旗船非遭風雨擱礁之患、不得更適他港、只在箱館下田二港而已。
- 十一曰、自立約半年之內、必許花旗派領事官往居箱館、以酌議各事。
- 十二曰、花旗國主、與日本國主、將所立之和約、各押名字、年半之內、兩相交執、以垂永久<sup>27</sup>。

『大日本古文書・幕末外国関係文書』に収録された条約文と比べて、『遐邇貫珍』の第一条は、その内容において一致している。第三条以下も原文通りではないがほぼその内容を正確に伝えていると言えるであろう<sup>28</sup>』と松浦章は指摘している。さらに、江戸だけではなく、帰路に立ち寄った琉球王国ともペリー艦隊が条約を締結させたことも記録している点が「近日雜報」の日本記事が *The China Mail* 紙の報道と異なる点であろう。

1854年9月1日第9号 (No.14)

- 六月十七日、琉球國地方、有花旗國憲章卑厘赴彼、與該國王及大吏等立和約。
- 第一條、花旗國人凡至彼居住貿易、皆得受球國一體保護平善、勿致刻待、勿有欺侮。
  - 第二條、花旗人於該處購買貨物、無論與何人交易、無論數目多寡、皆照公平時價、不偽不欺。
  - 第三條、倘有花旗船偶遭風水、漂至彼地者、由該國地方官派人救護、妥為料理安置。
  - 第四條、花旗人在彼國地方無論前往何處、閒遊賞玩、皆無禁阻。
  - 第五條、由該國指給地段一所、為花旗人攢葬之區、界內不得容縱閒雜人等、蹂躪踐踏。
  - 第六條、由該國選派諳熟伶俐帶水人、在海口外、專候花旗船隻駛到、帶引入口、照給

27) 松浦章・内田慶市・沈国威編著『遐邇貫珍の研究』（関西大學東西學術研究所研究叢刊24）関西大学出版部、2004年、605（114）～606（113）頁。

28) 上掲、37頁。



公道工價<sup>29</sup>……

上掲の六項目によって、アメリカ人に対して、貿易の平等・居住の自由・漂流民の救助・墓地の提供など、許可や協力を施すべきであることが琉球側には求められていた。琉米修好条約のほか、1854年6月1日第6号（No.11）の「琉球雑記述畧」にペリー艦隊と同行した中国人の通訳羅森<sup>30</sup>の琉球見聞も掲載されている。地理・習俗・政治・文化などについて、様々な琉球王国の実像を伝えていた。

以上から見れば、当時の香港で主流であった英文新聞 *The China Mail* 紙と、中国語新聞類刊行物であった『遐邇貫珍』の「近日雑報」は、共にペリー艦隊の動向に多大な関心を持っていたと言える。報道内容について、*The China Mail* 紙の記事は、最初の日米交渉に注目していた一方、『遐邇貫珍』は琉球交渉を含め、より全面的にペリー艦隊の二度の来航を伝えた。そして、詳細な交渉過程を報じた *The China Mail* 紙の記事と異なり、「近日雑報」は日米・琉米が締結に至った条文を詳細に報じていた。さらに、記事構成について比較すれば、情報・評論を主として組み立てられた *The China Mail* 紙の記事に対して、「近日雑報」は論評よりも主に情報の発信のみで誌面を構成していた。ここでは、なぜ英字新聞の *The China Mail* 紙より先に日米・琉米が締結した条約内容を手に入れ、翻訳して詳細に紹介できたのが疑問点となる。この点については、後述したい。

## 2.2 ペリー来航に対する態度

*The China Mail* 紙は「日本側が何度もペリー提督の要求に屈したにもかかわらず、彼らは交際において常に懇懇で友好的であり、別れのときは心から名残を惜しんだそうである<sup>31</sup>」とペリー来航時における日本側の様子を伝えた。同様に、1854年9月1日第9号（No.14）の「近日雑報」にも

28日（嘉永七年・咸豊四年六月二十八日）、アメリカ特派大使ペリーが日本と条約を結んだ後、香港に戻ろうとする際に、両方はお互いに応酬して和やかであった。西洋人は今後貿易の繁栄を望んでいる一方、両国は利益や成果を共有できるように期待している。日本で作られた新異奇巧の物は西洋にないが、精美であり珍しい西洋の物も日本に欠けている。両国は貿易を通して交換できれば、よく利益があるに違いない。日本人と西洋人は、すべて神の赤子である。そして、この大地が生み出した国々の人もみなお互いに力を添え、助け合うべきである<sup>32</sup>……

29) 上掲、617（102）頁。

30) 「『琉球雑記述畧』の筆者は『遐邇貫珍』1854年11月1日第11号に掲載された「日本日記」に見える琉球国上陸の記事と関連するであろう。そうであれば、「日本日記」の著者とされペリー艦隊に乗船していた羅森の作と言えるであろう。」松浦章・内田慶市・沈国威編著『遐邇貫珍の研究』（関西大学東西学術研究所研究叢刊24）関西大学出版部、2004年、40頁。

31) 横浜開港資料館複製版 *The China Mail* (1853.8.11・NO.443) Vol.9, p130. 訳文『外国新聞に見る日本』（第1巻1852-1873本編）、国際ニュース事典出版委員会、40頁より転載。

32) 「廿八日、花旗國總憲章卑厘由日本國建立和約、事竣回港、在該國未登程時、兩邦人往還應酬、皆極和諧、西邦人甚翼其此後貿易日益增盛、兩地同享其利。日本國所產造新異奇巧之物、西邦所無、而西邦所賦造珍美精華之物、亦日本所乏。兩邦彼此交易、其益何可勝言。日本與西土人、均皆上帝赤子、凡此寰瀛大地所生、各國之人、皆應互為贊輔、相助為理……」松浦章・内田慶市・沈国威編著『遐邇貫珍の研究』（関西大学東西学術研究所研究叢刊24）関西大学出版部、2004年、617（102）頁。

とあるように、交渉における日米の友好・和睦が唱えられていた。一方、ペリー提督が日本を去った15日後に江戸湾に入ったアメリカ商船レディー・ピアス号（ペリー艦隊に随行して日本を訪れた）は、「戦争道具は持たず、親善と平和の使者としてであった<sup>33)</sup>」ことを標榜していたが、

パロウス（レディー・ピアス号の船主）によれば、日本は混乱した中国の現状を知っており、それがおもに外国との交易に原因があると見ているという。さらに同氏は、氏が購入しようと欲した品物に法外な値をつけているのは、ペリー提督の要求に皇帝が応じたのはただ恐怖のなすところだったことを示すというのである<sup>34)</sup>。

とあって、日本側はアメリカ船の軍備や戦闘力を恐れ、次第にアメリカ側の威圧に屈して、条件を入れざるを得なくなった一面もあると *The China Mail* 紙は報道していた。

さらに、1854年10月26日付 *The China Mail* 紙は *New York Weekly Herald* 紙6月14日付の記事を転載し、日本の開国におけるペリー来航の意義について、

この功績は今日ではささいなものに見えるかもしれないが、日本が世界貿易へ国を開き、今まで近づけなかった野蛮の巢窟へ文明生活が浸透するのは、歴史の輝ける1ページに残るべきごととなるはずだ<sup>35)</sup>。

と肯定する一方、ペリー艦隊の日本進出を野蛮地域への先進文明の浸透とみなし、西洋文明の優越を自慢していたようであるとも論評した。そして、*The China Mail* 紙は

しかし今（ペリー来航後）、私たちの援助がなくても日本は開かれる可能性が高い。イギリスが協定から除外されるかどうかにかかわらず、彼ら（イギリス政府）が委ねる人々は、貿易における実在であり、そして拡大する利益を最大限に確保するように条件を達成すると同時に、日本人に誤解を招く可能性を抑えようとするべきであると私たちは信じている。そのために、多くの中国条約のように一方的であり、そして乱用された利己的な条件を避けるべきである<sup>36)</sup>。

とアメリカに比べ、日本との開国交渉が遅れた事実を示した上で、日本の開港通商協定においてイギリスが除外される可能性を提起し、対日本交渉の中で、中国との条約における利己的な姿を変えるべきであるとイギリス政府に忠告していた。このように、*The China*

33) 横浜開港資料館複製版 *The China Mail*(1854.8.24・NO.497) Vol.10, p134. 訳文『外国新聞に見る日本』(第1巻1852-1873本編)、国際ニュース事典出版委員会、49頁より転載。

34) 同上。

35) 横浜開港資料館複製版 *The China Mail*(1854.10.26・NO.506) Vol.10, p171. 訳文『外国新聞に見る日本』(第1巻1852-1873本編)、国際ニュース事典出版委員会、53頁より転載。

36) Now, however, that Japan is likely to be opened without our aid, whether or not England maybe excluded from the arrangements, we trust those upon whom they devolve will enter into such stipulations as shall best secure the true and enlarged interests of commerce with the least chance of creating misunderstanding with the Japanese; and to that end many of the one-sided and selfishly abused provisions of the China treaties ought to be avoided. 横浜開港資料館複製版 *The China Mail*(1854.3.2・NO.472) Vol.10, p34.

Mail 紙はイギリス政府に献策する役割が鮮明であった。一方、「真正面からイギリスの立場を弁解した文章のほか、『遐邇貫珍』は最初の一年間、欧米（イギリスを中心として）における制度や習慣の優秀性を示した文章もかなり多かった」と卓南生は指摘しているが、「近日雑報」は

1854年2月1日第2号（No.7）

日前揚帆赴日本國之花旗師船、其上月駐泊本港時、數次置演戲劇。凡英師船、及居港者、皆得往縱觀看。兩國人皆極諧睦、蓋因志趣同向、均欲有以推廣貿易共臻平康景象者也。其火輪師船三、常行船二、於本月十四日啓程前詣日本索取回書。開行時、英師船亦聲炮相送<sup>37</sup>……

と述べて、英米が日本に対する貿易政策で一致していたため、ペリー艦隊が二度目の日本への出航に際して、英艦が礼砲を放ち、見送ったことを掲載し、英米の友好関係を伝えるにとどまった。このように、ペリー艦隊の訪日に対して、*The China Mail* 紙と比べ「近日雑報」は直接的な論評を表明していないことが読み取れる。

前述のように、『遐邇貫珍』は1850年代の香港で、おそらく唯一の中国語定期刊行物であったが、歴代の主編者や責任者はイギリス宣教師が務めることがほとんどであった。中国人の編集者が協力していたが、母国語を使用する英新聞 *The China Mail* 紙より、記事編集において劣ったものになるのは当然であったろう。この点は紀年の使用からも明らかに示唆される。統一的に西暦を使う *The China Mail* 紙とは異なり、『遐邇貫珍』または「近日雑報」は出版巻号を西暦で記しているが、記事の中では旧暦を用いる場合が多かった。

また、ニュースソースに関しては、「近日雑報」に個人的な手紙から収集されたもの、上海など五箇所の開港場における欧米領事館の役員や商社の人々、宣教師などへの取材、そして「京報」のような中国語資料から引用されたものが多かった<sup>38</sup>。*The China Mail* 紙は、1840・50年代から広東・ロンドン・ラブアン・カルカッタ・サンフランシスコに記者を派遣し記事を集めると同時に、欧米の新聞記事を転載することも多かった。したがって、ペリー艦隊の動向について、欧米の新聞を転載した *The China Mail* 紙は日米交渉の過程を詳細に再現できたのに対して、「近日雑報」は収集した香港宛ての手紙から情報を抽出して、それが英文で書かれた場合には翻訳したため、ほとんどが詳細な情報の無い手短な記事のみが掲載される結果となった。

ペリー艦隊の訪日に対して、日米交流の意義を肯定しつつも、日米交渉における友好的な情勢を宣伝するという点について、*The China Mail* 紙と「近日雑報」は共通していた。一方、*The China Mail* 紙はペリー艦隊の成功を優れる西洋文明の浸透とみなしたが、「近日雑報」は「互為贊輔・相助為理<sup>39</sup>」のように主に平等共栄を主張した。また、*The China Mail* 紙は日本交渉において利己的な条約の締結を慎み、それを成功したアメリカの競争力に目を向けるようイギリス政府に忠告していたが、「近日雑報」はペリー艦隊へ英艦が

37) 注22。

38) 卓南生「『遐邇貫珍』(1853～56)--香港最初の華字月刊紙についての考察」応用社会学研究(19)、1974年、155頁。

39) 注32。

礼砲を打ち上げたことを記録して、英米の「志趣同向<sup>40</sup>（志向が同様であること）」を強調していた。つまり、日本進出に対して、「近日雑報」は競争より英米の協力を唱えていた。

一方、すでに述べたように「近日雑報」の中で日付のような細かい部分に関する混乱が多かったが、なぜ英字新聞より先に日米・琉米が締結した条約内容を手に入れ、訳して詳細に羅列できたのか、問題が残されている。1845年2月20日付けの *The China Mail* 紙創刊号に、当時の香港植民政府長官フレデリック・ブルースは、*The China Mail* を官庁機関誌と認める文を寄せた<sup>41</sup>。したがって、1845年から1858年までほぼ政府公報のような存在と見なされ、また、1847年第二代香港総督サー・ジョン・フランシス・デイビス（Sir John Francis DAVIS・戴維斯）がロンドン本土政府に報告する際、*The China Mail* を香港政府の定期刊行物と認めていた。*The China Mail* 新聞館は1845年からイギリス植民政府と契約を結び、香港政府公報の印刷を務めた。ただし、1850年代中期 *The China Mail* 紙は香港政府の汚職問題に対する調査を行い、当時の総督サー・サミュエル・ジョージ・ボナム（Sir Samuel George BONHAM・文咸）と対立していた。そのため、*The China Mail* は1853年から1855まで政府公報の業務をめぐる競争において、英字新聞 *Hongkong Register* に敗れて政府契約を失った。当該期は『遐邇貫珍』が刊行されていた期間と合致していた。一方、ペリーの首席翻訳官としてペリー艦隊の訪日を協力したサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（Samuel Wells Williams・衛三畏）は同行する中国人の助手羅森が書いた日本紀行文「日本日記」を英文に訳して *Hongkong Register* の増刊 *Overland Register and Price Current* に投稿した<sup>42</sup>。後に編集された中国語版は『遐邇貫珍』に掲載された。また、当該期 *Hongkong Register* の出資者と編集者 Robert Strachan（士當郎）は経済的に『遐邇貫珍』を支えるモリソン教育会のメンバーであった。以上のつながりから見れば、条約調印に参加したウィリアムズあるいは関係者が *Hongkong Register* または『遐邇貫珍』に条約内容を投稿した後、『遐邇貫珍』の編集者はその内容を訳して掲載できたかもしれないと筆者は推測している。一方、政府との関係が弱くなっていた *The China Mail* 紙が、日米・琉米和親条約の内容を刊行できなかったのは当然ではないだろうか。

### 3 和漢唱和：「日本日記」の違和感

『遐邇貫珍』に掲載された日本関係の記事は、「近日雑報」欄の日本ニュースの他、羅森が書いた紀行文「日本日記」三部（「日本日記」・「続日本日記」・「続日本日記終」）があった。それぞれ順に1854年11月1日第11号（No.16）・1854年12月1日第12号（No.17）・1855年1月1日第1号（No.18）に連載された。「日本日記」だけではなく、外国見聞あるいは外洋紀行は『遐邇貫珍』の中に多く現れる。例えば、1853年11月1日第4号（No.4）「阿歪希島（ハワイ）紀畧」、1854年7月1日第7号（No.12）「瀛海筆記（イギリス見聞）」、1854年8月1日第8号（No.13）「瀛海再筆」などがある。ただし、執筆姿勢において「日本日記」はそれらの紀行文と明らかに異なっていたし、『遐邇貫珍』の編集方針にもそぐわないものであったのかもしれない。

40) 注37。

41) It is hereby notified that from and after 20th instant and until further orders, the "China Mail" is to be considered the Official Organ of all Government Notifications. 横浜開港資料館複製版 *The China Mail* (1845.2.20・NO.1) Vol.1, p1.

42) Tao Demin, *Negotiating Language in the Opening of Japan: Luo Sen's Journal of Perry's 1854 Expedition*, *Nichibunken Japan Review* (17), 2005, p98.

### 3.1 『遐邇貫珍』の編集方針

『遐邇貫珍』の編集方針について、卓南生は『遐邇貫珍』創刊号の「香港紀略」、1853年10月1日第3号（No.3）の「英国政治制度」、1854年1月1日第1号（No.6）の「花旗國政治制度」、そして同号の「補災救患普行良法」を例として挙げて、「これら西洋文明、あるいは欧米の国々に関する紹介は、中国人に西洋文明の優秀性を示し、彼らの外国および外国人に対するイメージを変えることである<sup>43)</sup>」と指摘している。例えば、「香港紀略」は「清政府のアヘン禁止政策を攻撃し、外国に対する無知および外国に対する蔑視態度を強く非難し、イギリスの武力政策を弁解している<sup>44)</sup>」と示している。また「補災救患普行良法」は欧米諸国における生命保険と火災保険の制度を紹介し、その制度が中国でも実行されるべきだと力説している<sup>45)</sup>と述べている。実際『遐邇貫珍』の編集者（メドハースト・ヒリアル・レッジ）の交替によって編集内容や誌面構成には多少の変化があったが、中国に比べて西洋をより優位に、あるいは目標とすべき対象と見なすような編集方針は一貫していた。このような編集方針が、「阿歪希島紀畧」、「瀛海筆記」、「瀛海再筆」の中でいかに反映されていたのか、確認していきたい。

まず「阿歪希島紀畧」・「瀛海筆記」・「瀛海再筆」をから窺えるのは、いずれにもキリスト教に関する描写が一定の紙幅を占めている点である。

（ハワイの人は）当初アメリカのキリスト教（筆者注：プロテスタント教）を恐れたが、宣教師はここに教えに来てから、習字を優先させたため、今みなそれを習い、初めて聖書を崇めることになった……国政は新たに創られたが、必ず日進月歩するわけである。それは次第に神を信仰し、救世主イエスを崇拝することによって、知らずのうちに感化されるためである<sup>46)</sup>。

このように、プロテスタントを信仰するからこそ、ハワイがいつか振興できると書き手は信じていた。また、

（ハワイは）化外の島であるため、五穀がないが麵頭菓（筆者注：・パンノキ）が生えていることから見れば、地球にあるすべての物は、神の赤子であり、辺鄙な片田舎に存在しても神の魔法によって生命を恵まれるため、性質も与えられ長生きされることになるわけであると判明できた。それで、生命を持つすべての者は、心を一にして命を賜る神の大徳を讃えるべきではないだろうか<sup>47)</sup>。

43) 卓南生 「『遐邇貫珍』(1853～56) —香港最初の華字月刊紙についての考察」 応用社会学研究 (19)、1974年、154頁。

44) 上掲、153頁。

45) 上掲、154頁。

46) 「……懼畏邪神花旗國耶穌教、教師到化之、首以作字為急、今皆習之、始知崇奉聖書……雖國政新創、必日盛一日、蓋由其漸知敬拜上帝、信服救世主耶穌、又得聖神、為之潛移默化……（阿歪希島紀畧）」松浦章・内田慶市・沈国威編著『遐邇貫珍の研究』（関西大學東西學術研究所研究叢刊24）関西大学出版部、2004年、687（32）頁。

47) 「……竊思化外荒島、雖無五穀、而有此珍菓、可知託生於地球上者、無非上帝之赤子、於窮鄉僻壤又施此奇法以養之、然後含生負性、得以長養於無窮、然則凡有血氣者、亦安可不齊心贊頌、以答生成之大德哉。（阿歪希島紀畧）」上掲、687（32）頁。

とあり、造物主の恩寵で五穀がなくとも独特なパンノキが生育していたため、「上帝」の恩寵に感謝し一斉に讃えるべきであると、作者は伝道活動の意義を強調した。「瀛海筆記」にはロンドンの礼拝堂の様子が詳しく描かれている。

ロンドンの街中に大きな礼拝堂があった。高さは四十丈であるため、頂まで上りきったら、町にある宮殿、ビル、庭園、景物などは、すべて見えるようになった。この礼拝堂の城壁は、白石で作られ、堅くて精緻であった……その他、礼拝堂は数えないほど多くて、街ごとに一箇所があるようであった<sup>48</sup>……

作者は美しく光り輝く数多くの礼拝堂に驚嘆していた。さらに、「瀛海筆記」の中には西洋文明への憧憬が溢れている。

イギリスでは物産が豊かであり、建築が高くそびえて、政治が善明であり、制度も完備であり、それぞれ述べられることを私はすべて記すため、この記録は誇張した奇聞ではない……年中晴れより曇りの天気が多いが、景色が清美であり、夏は酷暑もない。森林花卉はどこでも生えて茂って、萎れることはない。それで、楽土と言えるのであろう<sup>49</sup>。

以上から見れば、「阿歪希島紀畧」・「瀛海筆記」・「瀛海再筆」はキリスト教への崇拝及び布教活動に焦点をあてる一方、西洋文化への憧憬も溢れている。その傾向は宗教・科学・政治制度など、様々な西洋文化を中国人読者に伝える一方、西洋文明の優越性を強調しようとする『遐邇貫珍』の編集方針と一致するのではないだろうか。

### 3.2 漢詩に見る「日本日記」の違和感

共通点として、「日本日記」は「阿歪希島紀畧」や「瀛海筆記」と同じ、当地の地理、政治、文化、そして習俗などを記録している。その中には、歴史的に中国と深く関わっていたことに関する情報も含まれている。例えば、

(ハワイは) 広東の十三分の一に当たる……植物は珍しくて異なるものが多かった。その中で、檀香は中国に販売されることもあった……遊ばれる綺麗な魚も数種あるため、中国で金魚を飼うように、ここは池を掘ってその魚を飼うことも見られた<sup>50</sup>。(阿歪希島紀畧)

イギリス人が作った便利なものの中で、車と船が最上である。近年、中国へ渡航した

48) 「……倫敦都中、有大禮拜堂、高四十丈、陟其巔、則都中宮殿樓臺、園林景物、歴歴在目……堂之垣牆、砌以白石、堅緻精好……此外禮拜堂多至指不勝屈、大約每街通衢、各建一所……」(瀛海筆記) 上掲、634 (85) 頁。

49) 「凡英土民物之蕃庶、建造之高宏、與夫政治之明良、制度之詳備、有可述者、皆筆而記之、非徒誇奇俶紀異聞也……歲中陰多於晴、但風景清美、盛夏無煩暑之酷、遍地林木花卉、舒放濃茂、花葉亦耐久而不凋、可稱樂土。(瀛海筆記) 上掲、635 (84) 頁～633 (86) 頁。

50) 「可當廣東十三分之一……植物亦多殊異、所出檀香、前屢販至中國……所產魚類亦衆、有數種亦美麗可玩、人鑿池以蓄之、如中國之養金魚然……」上掲、688 (31) 頁。

火船がよく見られる<sup>51</sup>……（瀛海筆記）

（琉球の）民間で中国言語文字がわかる者もいる……他に、ある家に見られた先祖の墓は中国明代のものと同じである<sup>52</sup>……（日本日記）

一方、「日本日記」の中で作者の羅森は言語が通じないが、漢文と漢詩を通して日本側の儒学者と交流できたことは、外洋見聞のみを記す「阿歪希島紀畧」や「瀛海筆記」とは最も異なるところであろう。羅森はサミュエル・ウィリアムズの助手を務め、日米交渉において協力した人物であり、英語に精通し、漢文・漢詩に優れていた。そのため、日本訪問の間、羅森は多くの日本儒者と筆談した。例えば、羅森が横浜において儒者平山謙二郎と書信を交換し、「中国治乱之端」について論議し、

……世界情勢が一変したため、今は各国君主が天地のために仁愛の心を持ち、庶民のために本分をまっとうするべき時期である。向喬（羅森の字）はアメリカ火船に乗って世界を周遊したため、自らそのような情勢が見えたのか。もしそうでなければ、至るところに足を運んでそれを各国の君主に伝えるべきである。そうしたら、孔孟の志が千万年後にも続けられ世界中に広がることになるわけである<sup>53</sup>。

とあって、「孔孟の志」を抱く平山謙二郎は、儒学を世界中に伝えるように羅森に願っていた。

筆談だけではなく、各地で羅森と日本側の儒者たちは漢詩を贈ったり答えたりするように唱和を交わしたことも見られる。ここでは、例を挙げてみたい。下田を出航する際に、羅森は堀達之助、森山栄之助などに漢詩を求められ、以下の七言詩を贈った。

避亂夷船亦一奇、 外国の船に乗ってあなたは旅する、  
呉中鞞鼓不聞知。 故国災いを離れて。  
翻將萬里東來色、 大海を渡って東の国に、  
快觀芙蓉絶世姿。 あなたはやってきて、私たちに平和をもたらしてくれた<sup>54</sup>。

この詩に対して、儒者関研次は以下の漢詩を詠んで返歌し、羅森に信頼を与えたようである。

横濱相遇豈無因、 私たちがここで出会ったことはまったくの偶然でしょうか、

51) 「英國利捷之製、莫如車與舟。火輪船近年多駛至中土……」上掲、634（85）頁。

52) 「民間亦有識中國言語字墨者……另有人家祖墳、與中國明塚無異……」上掲、601（118）頁。

53) 「……今世界形勢一變、各國君主、當為天地立心、為生民立命之秋也。向喬寓合衆國火船、而周遊乎四海、有親觀焉者乎。若不然、請足跡到處、必以此道說各國君主、是繼孔孟之志于千萬年後、以擴于全世界中者也。」上掲、600（119）頁。「為天地立心、為生民立命」は北宋儒学者張載の名言「為天地立心、為生民立命、為往聖繼絕学、為萬世開太平」より引用されている。

54) 翻訳は *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan: Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, Under the Command of Commodore M.C. Perry, United States Navy, by order of the government of the United States* の日本語版『ペリー提督遠征記』（FRANCIS L.HAWKS 著・オフィス宮崎訳、栄光教育文化研究所、1997年）に依拠している。なお、当該翻訳については疑問なしとはしないが、今後の検討に委ねることとする。

和議皆安仰頼君。 条約と平和が得られたのはあなたのおかげです。  
 遠方駛舌今朝會、 遠くから見知らぬ人々がやってきて、言葉も分からない私たちは  
 幸観同文對語人。 あなたの筆と舌がなければどうなっていたことでしょう<sup>55</sup>。

つまり、羅森を「同文對語人（同じ言葉を話す人）」のような仲間として関研次は応じていた。合原猪三郎（合原操藏の兄）も漢詩を詠み、離別の愁傷を表し、名残惜しげに羅森を見送った。

樹外雨收鶯語流、 雨はあがった。ウグイスが木立の中でさえずっている。  
 聲聲啼送旅人舟。 そよ風に乘せて外国船に向かって歌っている。  
 不知黃帽金衣客、 愚かな鳥よ、お前はあの船の帆がすぐに向きをかえてしまうのを  
 似解轉篷飄絮愁。 知らないのだ。黄色い帽子と金モールをつけた人々は去っていき、  
 私たちは悲しみに取り残されるのだ<sup>56</sup>。

後にペリー艦隊が函館を去る際に、平山謙二郎は離別詩の代表作、王維の「送元二使安西」を团扇に書いて羅森に贈り、お互いに友情を唱えていた。

渭城朝雨浥輕塵、 渭城の朝雨はほこりを洗った。  
 客舍青青柳色新。 旅館の周りに植えられた柳の緑色が一新された。  
 勸君更盡一杯酒、 あなたにもう一杯を勧めて、  
 西出陽關無故人。 陽関を出れば、友人がいないからである。

羅森もその詩に応えた。

火船飛出粵之東、此日揚帆碧鏡中。歷覽螺蜂情不盡、遙瞻蛟室與無窮。  
 雙輪撥浪如奔馬、一舵分流若耿虹。漫道騎鯨沖巨浪、休誇跨鶴振長風。  
 琉球乍別雲方散、日本初臨雪正融。暫寄一身天地外、知音聊與訴離衷。

東に向かい、私は火の船に乗った、旅をして新しい風景に私の胸は踊る。  
 私の目に、山々がなんと美しく映ることか！はらかな海原を眺める喜び、  
 蒸気船の外輪は鶯の翼のように強く、舵は軽々と船を操る、私たちは進む、  
 馬のかわりに鯨をつけて、ミサゴのように強く、激しい風と戯れるながら、  
 静かな月夜に浮かぶ美しい琉球の島、雪を頂く日本の山々。  
 私はなんとちっぽけな存在であろう、私は言おう、友好に虚栄はいらない<sup>57</sup>。

言葉が通じないが、漢詩を介して共感を得た二人はお互いの「故人」または「知音」となった。帰国直前に、下田に戻った羅森は日本官に漢詩が贈られた。

55) 同上。

56) 同上。

57) 同上。



君産廣東我沽津、あなたは広東で、私は天津で生まれた。  
相逢萍水亦天縁。天の縁のおかげでここで偶然に出会った。  
火船直撃鯨濤至、火船は波を乗り越えてここまでやってきたので、  
看破五湖無限邊。世界が広大で果てしがないとわかった。

そして、「あなたは中国の人だが、なぜ西洋人を手伝うのか<sup>58</sup>」という質問に対して、羅森は以下の漢詩を通して説明した。

日本遨遊話舊因、不通言語倍傷神。雕題未識雲中鳳、鑿齒焉知世上麟。  
璧號連城須遇主、珠稱照乘必依人。東夷習禮終無侶、南國多才自有真。  
從古英雄猶佩劍、當今豪傑亦埋輪。乘風破浪平生願、萬里遙遙若比鄰。

日本に旅をして昔の話をしようが、言語が通じないため悲しく思う。雕題人は鳳凰を知らない、鑿齒人は世に麟の存在がわからないように蛮夷は無知である。極めて貴重な璧は持ち主に、珠は人によってこそ光る。習礼において東の国に匹敵するものがない。南の国は人材が多く真材が必ずいる。古から英雄は剣をつけて、今までも豪傑はこれを続けている。追い風に乗り波浪について進むのは一生の願望であるため、万里を越えてきたこの国は隣のような存在である。

つまり、世界を行きめぐろうとするのを志すため、ペリー艦隊に協力して日本に来たと羅森は自弁していた。前述のように、送別の詩を中心に漢字・漢詩を通して、羅森は中国文化に憧れる日本儒者たちと詩文を唱和し、お互いに良い印象を持ったことが「日本日記」から読み取れる。そのほか、日本側の儒学者との交流を持ったため、羅森は「……その地域によってふさわしい政治政策が創られる。日本は中華より小さいが、強盗劫掠の気風はいまだ見たことはない<sup>59</sup>……」とあるように日本を肯定的に評価したことが多い。

同じく外国見聞であっても、ペリー艦隊の日本訪問に協力した羅森の「日本日記」は、日本見聞や日米交渉の様子を記したが、日本儒者との交際により焦点を当てたため、ペリー来航の意義は結果的に希薄なものになった。その一方で、いわゆる砲艦外交とは相反する和漢唱和の意義を強調した。このように、『遐邇貫珍』の編集方針と合致した「阿歪希島紀畧」や「瀛海筆記」と異なり、「日本日記」はその編集方針から逸脱しているため、主客転倒のような違和感が感じられると言わざるを得ない。

## おわりに

香港開港当初の中国語定期刊行物である『遐邇貫珍』は当時中国人読者のなかでどのような反響があったのか、まだ明らかにされていないが、イギリス宣教師が作り上げた編集方針の下で刊行されていたため、キリスト教の布教のほか、西洋文化・中国事情・欧米ニュー

58) 「子乃中國之士、何歸缺舌之門？」松浦章・内田慶市・沈国威編著『遐邇貫珍の研究』（関西大学東西学術研究所研究叢刊 24）関西大学出版部、2004年、581（138）頁。

59) 「……夫一方斯有一方之善政。以日本國雖小于中華、然而搶掠暴劫之風、亦未嘗見……」上掲、590（129）頁。

スなどを中国人読者に伝えていた一方、イギリス香港植民政府の政策を正当化する役割も果たしていたと思われる。したがって、『遐邇貫珍』は中国人読者のために、あるいは中国人読者の立場から情報を発信したわけではなかった。また、『遐邇貫珍』は1853年から1856年にかけて、海賊海盜、太平天国及び秘密結社のため、香港を領有するイギリス植民地政府は複雑な中国事情に苦慮していたことが『遐邇貫珍』から読み取れる。それらの中国事情はイギリスの対日政策にも影響を与えた。

『遐邇貫珍』はペリー来航と同時期に刊行されていたため、日本に関する記事の掲載が多かった。ペリー艦隊の日本接近と、その日米交渉について、新聞性を有する「近日雑報」は、各国に派遣員を送り、派遣員が母国語である英語を使用して記事を執筆した英字新聞 *The China Mail* 紙より報道が簡略であったが、交渉成果としての日米・琉米条約内容については、詳細に条文を報道できた。また、ペリー艦隊の成功に対して、英字新聞と同じく日米交渉における友好を宣伝する一方、露骨に西洋文明の勝利を歓呼した *The China Mail* 紙と異なり、「近日雑報」はそれを抑えて日米の互助互惠を強調していた。そして、国際貿易を拡大するという共同目標のために、「近日雑報」は日本進出における英米の協力を唱えていた。

『遐邇貫珍』の中で最も世に知られたのは羅森の「日本日記」であろう。羅森はペリー艦隊の日本訪問に同行し、日本における見聞や日米交渉の様子を執筆した一方、日本側の儒者たちと筆談を通じて交流し、漢詩を唱和し、中華文化に対して憧憬を抱いていた日本の儒者に共感を覚えていたのである。そのため、「日本日記」は主に西洋文化を伝達し、西洋文明の先進性を唱えようとする『遐邇貫珍』の編集方針と矛盾する内容となったように思われる。